
異世界の店主さん

ヒスイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界の店主さん

【Nコード】

N2073Q

【作者名】

ヒスイ

【あらすじ】

異世界トリップしてしまった私は何故か美青年に！
弟子もなんかできたし自分の店も持つちゃった
トリップしたら追加されたチート能力でがんばるぞ！

勢いと成り行きだけになった スズラン堂 の店主としての日常です

登場人物

アヤメ・ユキハナ

男でかなりの美青年で スズラン堂 の店主

元は20歳の女子大生だったが何故か異世界トリップしてしまい女から男になってしまった

トリップ後は 黒髪に蒼い眼 神秘的な雰囲気的美青年

肩より少し長い髪を一つにくくっている

面白いことがとても好きで好奇心旺盛でもやる気がないときは何もしない、きちんとするときはする

あまり他人に臆すことがない 口調は気分で使い分ける 接客の影響で普段は敬語で笑顔

スズラン堂の店主になったのは勢いと成り行き

従業員兼弟子のリオンは大切な家族だと思っている

サエラに一目惚れ

リオン

スズラン堂の従業員兼アヤメの弟子

アヤメのことはとても慕っており師匠、店では店長と呼ぶ

銀色の髪と紫の眼を持った猫の獣人

死にかけて所をアヤメに拾われる

アヤメ曰く優秀な弟子

サエラ・メフィア

魔王様

魔術の失敗で女になってしまっ

薄水色の髪と金色の眼の美形 魔術失敗後は美少女に

アヤメに一目惚れ

スラリル・ウエハーン

吸血鬼でサエラの臣下 美形

嫁がいる 嫁を溺愛している

スズラン堂の常連客 アヤメの友人でもある

第一話 スズラン堂

小さい店などある店は魔族の国と人間の国の間にありました

店主を勤めるのは 黒い髪に蒼の眼の美青年、アヤメ
笑顔でお客様への接客にあたります

アヤメの手伝いをしている従業員は銀の髪に紫の眼の顔の整った猫
の獣人の少年、リオン

一生懸命尊敬する師匠でもあるアヤメの手伝いをしています

二人の働く店 スズラン堂 は雑貨から武器まで何でも扱っています
依頼がくれば依頼もこなしています

そんな二人は今日も働きます

店の外にはこんな看板がかけてあります

「種族、年齢、性別は関係ありません どうぞ私たちの店へ入って
見て買って行ってください」

「依頼がある方はどうぞ依頼を手紙に書いてポストに入れておいて
ください」

二人は入ってきたお客様に声をかけます

「いらっしやいませ 今日どのような物をお探しですか」

第二話 店長さんへの依頼

私はスズラン堂店長 アヤメともうします
何かトリップしちゃって男になって弟子ができて成り行きで今にいたります。ええ。

でも今の生活は充実してますし優秀な弟子はいますし言う事ないです
すね

お店も生活には困らない位には儲かってますし
たまに厄介な依頼もきますが面白いので良しとします

チートな能力も手に入れてもう本当に万々歳です

色んなお客様から聞ける話は役に立つし面白いので店長になって良かったな〜と思いますよ

「店長」

おや、弟子兼従業員のリオンが呼んでますね

「はいはい、いまいきますよ」

返事を返しリオンの方へとかけ寄ります

「どうしたんですか？」

「店長、依頼の手紙が来てますよ」

「どれどれ・・・これは・・・スラリルさんからですね」

スラリルさんとは我が店常連さんの吸血鬼さんで魔王の側近で偉い人らしいですよ
すっごい美形さんなんですよね〜

「と・・・ゆうことは厄介事ですね店長」

「こら・・・お客様のことをそんな風に言うんじゃないやありません」

リオンが顔を顰めてそう言ったので軽くたしなめる

まあ・・・たしかに私にとっては面白いことでもリオンにとっては厄介事だったことしかないですど・・・
手紙の封を開き手紙を読む

「え〜と、・・・ふ〜む？」

「店長、なんて書いてありましたか？」

「いや、それがね・・・すぐに魔王城に来いとかかいてないんですよ」

う〜ん・・・行かないと後で面倒だしな・・・魔王城はまだ行ったことないんですよ・・・

もう少し何か書けなかったんでしょうかね

「・・・どうしますか？」

「・・・行くとか、後で面倒なのは嫌ですし」

「そうですね・・・はあ・・・」

リオンがため息をつく気持ちはわかりますが我慢してくださいね

「それじゃあ・・・明日出発しますよ、魔王城までは半日ほどかかるはずですし」

これは私とリオンだから半日で行けるのであって普通の人間だともっとかかりますかね？

「わかりました・・・準備しておきますね」

「うん・・・はやく行って片付けてきましようね」

「そうですね・・・」

さて、頑張つて魔王城まで行きますか・・・面白いことがあるといいんですがね

第三話 魔王城への道のり

魔王城へいくための準備を済ませて店の入口に

「お休みさせていただきませす スズラン堂店主より」

と書いた貼紙をはる

「師匠」

「リオン、準備はできましたか？」

「はい 師匠」

「では 行きましょうか」

「はい」

リオンの準備も整ったようなので魔王城へと出発しましょう

魔王城へと続く道をリオンと二人歩いて行きます

魔王城って遠いんですよねえ

時々魔族の住む土地にしか生息していない薬草があるので
採取し、リオンと雑談をしながら歩く

結構早めに歩いているのであともう少しぐらいですかね

おや、もうお昼の時間ですね

「リオン 休憩がてら昼食にしましょう」

「はい！師匠」

適当に座れる石に腰掛けてリオンに声をかける

リオンも嬉しそうですね

耳と尻尾が嬉しそうに揺れてます

可愛いですねえ

「私お手製のサンドイッチとスープ、デザートはアイスクリームです」

私は持つてきていたカバンの中からサンドイッチの入った箱と

スープの入った魔法瓶、アイスクリームの入った小型アイスBOXを取り出す

魔法瓶や小型アイスBOXはこの世界にはなかったので私が作ってみました

「では、食べましょうか」

「はい」

「いただきます」

いただきますと言う習慣はこの世界にはないのでですけど良い習慣だ
と思うのでリオンにも教えてみた

そしたら 俺もします！ と感心しながら言ってくれたのでいつも

言うことになっています

「師匠、師匠の料理はいつも美味しいです!」

「そうですかね?ありがとうございます」

リオンは本当に美味しそうに食べてくれるので作るこっちにも作りがいがありますよね
ニコニコ笑ってくれるリオンの笑顔だけでもうお腹いっぱいですよ
私、少食ですし

「師匠?食べないんですか?」

リオンが食べる手を止めて聞いてくる

「ん?ああ、食べますよ でもリオンは遠慮なんてしなくていいんですよ」

「でも師匠がお腹空いてるのに俺だけいっぱい食べるなんて・・・」

ああ、もう本当に可愛い弟子ですね〜もう

「リオンが笑顔になってくれたらそれだけでいいんだよ」

「・・・そうですか?」

「そうそう、ほらスープも飲んでごらん」

そう言ってスープをコップに注ぎリオンへと手渡す

「じゃあ・・・いただきます」

「うん、アイスクリームも後で食べようね」

「はい」

リオンが全て食べ終わったところでアイスクリームを器へとよそう

「美味しい？」

「はい！甘くて美味しいです！」

「よかった、私も少し食べてみましょうかね」

うん、なかなかですね

そして、ほのぼのした昼食も終わりました

「では、魔王城はでもう少しですね」

「そうですね、師匠」

「頑張っていていきましょうね」

「はい」

面白い事が待っていますように願っておきましょう

第四話 魔王城到着

魔王城へと到着しました

魔王城の前には立派なごつい門が立っています

・大きな門ですね〜どこから入ればいいんでしょう？

「おい、その者 何の用だ」

あちらから声をかけてくれましたね

兵士風の魔族の男性に私は笑顔で用件を伝えます

「スズラン堂店主 アヤメと申します。こちらは弟子のリオンです
スラリル様からの依頼で参りました」

手紙を差し出し確認をしてもらいました

「たしかに・・・スラリル様からの手紙だな」

「ええ・・・通していただけますか？」

「ああ・・・手間どらせて悪かったな」

少しバツの悪そうな顔でそう言ってこられたので

「いえいえ、お仕事ご苦労さまです」

と返しておきました、仕事熱心なのはいいことですよね

「ありがとよ・・・門を開けるからちよつと待っててくれ」

「はい、お願いします」

男性がどこかへ行くと少したってから門がゆっくりと開く

そこにはメイド服を着た茶髪で赤色の眼の綺麗な女性が立っていた

「アヤメ様とお弟子様ですね、お待ちしておりました どうぞこちらへ」

女性がそう言っつて城の中へと促す

「ではスラリル様のところまで案内させていただきます」

「お願いします」

魔王城の中は細工のほどこされた壁と柱でできており

見事な調度品が所々に飾られてある

長い廊下を歩きながら観察する

なかなか趣味のいいお城ですね

私のある友人にも見習って欲しいものです・・・

「こちらがスラリル様のお部屋でございます では私はこれで失礼させていただきます」

女性は綺麗に一礼しその場を離れていった

「・・・とりあえずノックしてみようか」

「そうですね・・・」

スラリルさんの部屋をノックする

「アヤメか？入ってこい」

そんな返答が返ってきたのでドアを開け入らせてもらう

「失礼します」

リオンも続けて入る

ソファーに座ったスラリルさんに出迎えられる

「まあそこに座ってくれ」

スラリルさんが傍にあるソファーを指さしながら言われたのでソファーへとリオンと一緒に座らせていただく

それにしても相変わらずの美形である・・・白銀の髪と赤色の眼の綺麗系の美形だ

「それでは私にされた依頼の内容は何でしょう？」

私はそう切り出す

「ああ そのことだが・・・私からは話にくくてな、本人にあってほしいんだ」

「それでは依頼主はその方向でしょうか？」

「いや、その方は誰にも会いたがられなくてな私が勝手に依頼した」

「・・・それは私は会いにいかないほうがいいのでは？」

無理に強制しないとイケないことを手伝う気はないですからね

「今日の朝に話したから大丈夫だ　とにかく一回会ってほしいんだ」

「はあ・・・では一応会わせていただきます」

「その方は別の場所におられるからそちらへ移動しよう」

「わかりました、案内してください」

「ああ行こう」

とりあえず本人から話を聞かせていただかない事には始まりません
からね

第五話 魔王様の事情（前書き）

魔王様視点です

アヤメが呼ばれた理由について

第五話 魔王様の事情

余は今代魔王であるサエラ・メファイアである
年は22・・・かそこらだったと思う

余の父親は先代魔王であり母は妾の一人だった
兄弟は他にも沢山いたが潰し合いをした結果余だけが残った
そして余は魔王となった

余は人間との間の戦争をやめる事にした
もう醜く争いを続けるのは嫌だった
腑抜けと言われても腰抜けと言われても、もう戦いたくなかった

「魔王様、今日の書類です」

書類が持つてこられ机の上に置かれる

余の机の上は書類が山となっている

今の余の仕事は書類処理が主になっている

余は魔王城から外に出たことがない

小さい頃からずっとずっと城の中しか知らなかった

余は信頼できる臣下はいれど友や恋人はいない

初恋もまだだ、女性経験はゼロと言っていいだろう

余はそんな存在が欲しかった

互いに信頼し対等の立場であり愛し愛され慈しみ、支え合える・・・
そんな存在が欲しかった

でも余は魔王城から出られなかった
だから、この前見つけた魔法・運命の相手に逢える魔法を使つて
みようと思った

もしかしたら・・・もしかしたら出逢えるかもしれないとゆう
少しの希望に縋りたくなつた

「・・・余はサエラ・メファイア、余の運命の相手が余に巡り逢える
ように余は願う」

魔方阵を描きその中に入り魔法の呪文を唱える
唱えた瞬間に魔方阵が光り余は光に包まれた

「・・・なんだ？これは」

光がひいた時に呟いた声の高さに違和感が走る
まるで女のような鈴の音のような声が響く

「・・・女になってしまったのか？」

胸の膨らみを確認し、呟いた
魔法を失敗してしまう事など今までなかったのに

元に戻る方法もわからない

きっと今の自分の顔は真つ青なのだろう

ドアがノックされた

「魔王様？どうかいたしましたか？入りますよ」

臣下のスラリルが返事のない余を心配し入って来る

「魔王・・・様・・・これは・・・!?!?」

スラリルが目を見開き余を凝視する

「どう・・・なされたのですか?」

「・・・魔法の失敗だ・・・」

「貴方が魔法に失敗なさるなど・・・どのような魔法なのですか?」

「・・・言えぬ」

恥ずかしくて言えるわけがない

「・・・そうですか、では今は言って頂かなて結構です」

「ああ・・・」

「余は・・・余の部屋から出ぬ・・・」

元に戻るまで部屋から出れない

「・・・わかりました、ではまた来ます魔王様」

スラリルは背を向け部屋の外へと出て行った

余はそれからすぐに自分のベッドで寝てしまった

その夜久しぶりにみた夢は幸せな夢だったよ
うなきがした

第六話 魔王様と出逢い

朝日が部屋にさしこみ目が覚める
気分は最悪だ

服は昨日スラリルが持ってきた女物のドレスに着替える
こんな服は着たくないが余の服はサイズが大きすぎた

自分が酷く無様に見える

もう元に戻れないのかもしれないのだから
ずっと一生女のままだろうか

ならいつそ此処をでて、ひっそりと一人で暮らそうか・・・

そんなふうな思考が辿り着きそうになったころ部屋がノックされる

「スラリルです魔王様、少しお話があります」

「・・・入ってこい」

「失礼します」

ドアを開けスラリルが入ってくる

「魔王様、今日は会って頂きたい者がいます」

「・・・嫌だ」

今誰かに会えなど無理なことだ

「私の友人であり信頼の出来る者ですから安心してください」

「う……でも余はこんな姿で」

「その姿の事で呼び出したのですからかまいません」

「会っていただきます」

・・・余は会いたくないのだが

「今日の昼過ぎに来るとおもいますのでよろしくお願いします」

そう言つてスラリルは部屋えお出ていく……

逃げてしまおうか……

余はそう思い部屋を出ようとする、しかし部屋からは出られないように魔法がかけられてあつた

スラリルめ……余が逃げぬように魔法をかけて行つたな……

余は肩を落としソファへと腰かける

「……諦めるしかないのだろうか……」

もう、そうするしかないのだろう

余は昼がくるまでこれからの事を考えながら過ごした

「魔王様、呼んでいた者が参りましたので広間へおこしてください」

スラリルの伝達係であるコウモリが余に知らせにきた

「今、行く」

覚悟を決めるしかないだろう

自室のドアを開け広間へとむかう

広間はとても広い 余はこんなに広くなくてもいいとおもつがな
広間には階段があり上に余の座る場所があり余の部屋からそこに行
ける

広間についた時誰かが来る気配が少し緊張しながらも出迎えるた
めに
階段を降りようとした

その時、なれていないドレスのせいかバランスを崩し階段を踏み外
してしまった

ちょうどドアが開く

余はこれから来るであろう衝撃を予想し眼を瞑る
落ちていく余は本当に無様だろう

だが予想していた衝撃はこず、逆に誰かに受け止められたようだ
受け止められた腕から温かい体温が伝わってくる

余はそうっと目を開く

そこには余を受け止めた黒い髪に蒼の眼の美しい青年の顔があった
少しの間その顔に見惚れてしまった
その青年の腕の中に自分がいることを認識した瞬間

余は自分の顔を紅く染めたのが自分でもわかった

余は恋におちた

第七話 店主と魔王様 出逢う

私は広間へとスラリルさんに案内されています

扉の前でスラリルさんが立ち止まり扉が開かれました

「魔王様が待つてらっしゃる」

そう言われ中を覗きこんだときに私の目に飛び込んできたのは階段から落下している少女でした

私はスラリルさんを押しつけ少女を受け止めるために階段へと走りよります

落ちてきた少女をできるだけ負担がかからないように優しく受け止めました

受け止めた少女はとても可憐で柔らかかった

淡い水色の髪はさらさらで瞼を閉じていて見えない瞳を見たいとおもいました

・ ・ ・ 一目惚れです、女だった私が少女に一目惚れだなんて可笑しいかもしれませんが
どうしてもこの少女に自分を好きになって欲しいと思ってしまったのです

此の世界にきて恋をして誰かを好きになるなんて思ったこともありませんでしたからね

初恋もしたことはなかった私は男になっても女性を愛した事はなかったし

男性にたいしても同じだったんです

少女はゆっくりと目をあけました

少し驚きながら目を開けた少女の眼は金色で引き込まれそうな瞳です

「・・・誰だ？」

ああ、声も鈴の音のように綺麗ですね

少女に向かって微笑みながら言葉を紡ぐ

「初めまして、魔王様 スズラン堂店主のアヤメです」

私の初恋が叶うようにどうか祈ってくださいね

第八話 魔王様のお願い

「・・・もう魔王様を降したらどうだ？」

スラリルさんが魔王様を抱えたままの私に言う
リオンもこちらを見ている

もう少しお姫様抱っこしていたかったんですけどね
若干残念に思いながら魔王様を降す

「・・・助けてくれて礼を言う、アヤメ」

魔王様が私を見ながら礼を言ってきたくれました
少し顔が赤いようです・・・熱でもあるのでしょうか・・・

「いえ、当然のことですからお気になさらずに」

微笑みながら返すと何故か顔をそらされた
一目惚れしてそうそう嫌われてしまったのでしょうか・・・
そう思うと少し落ち込んでしまいます・・・

「アヤメ、私の依頼について話すぞ」

スラリルさんがそう言った

私はもつと魔王様を見ていたかったんですが仕方ないですね・・・

「依頼は魔王様の事についてだ、この姿になってしまわれたのは魔術の失敗からだ」

そうなんですか・

「魔王様は元々は男性なのだが魔術の失敗で女になってしまわれて
アヤメなら何か知っているかもしれないと思ってな」

心は男性なんですか・私と似てますね、性転換してしまつたところ
が・

心が男性なら好きになつても何の問題もないですよ、お互い性別
は反対ですし

でも私は何故こうなつてしまつたのか分からないんです

お役に立てなくて残念だけれど、私からしたら女性の姿でいて頂い
たほうが好都合なんですよね・
今の私は男ですから・

「すみません、私は何故こうなられたのか全然分かりません お役
に立てなくて申し訳ありません」

「・・・そうか、魔王様どう致しますか？」

「あ・・・ああ、余は・・・このままでもいいぞ」

「！あれほど嫌がつておられたではないですか・・・まあ理由は少
し分かりますが・・・」

「う・・・うるさい！いいと言つたらいいのだ！」

魔王様が真っ赤になりながら言っている
そんな姿も可愛いですね

「・・・アヤメ、魔王様がこう言ってるからしゃるので今日は帰ってもらっていいか？」

「ええ、私は何も出来ませんし本人がよいと言ってらっしゃいますから」

魔王様に会うためにまた来ますけどね

「・・・もう帰ってしまうのか？」

魔王様がそう言って寂しそうに呟く
ああ、本当に可愛らしいです

「ええ、今日の所は失礼します」

「くなら余も連れて行ってくれっ」

！魔王様は何を言っているんでしょう
でも、別に私はスズラン堂にはもう一人ぐらい住む余裕ありますし構いませんけど
リオンが反対するかもしれないし・・・
好きな人が傍に居てくれるとそりゃ嬉しいですけど・・・

「魔王様、本気ですか？」

スラリルさんが聞く

「本気だっ、どうせこの姿では部屋から出れないのだからいいだろ
うっ！」

「・・・そうですか、そうですね魔王様はこの城から出た事がありますし」

「・・・いい機会かもしれませぬね」

「アヤメはどうだ？魔王様をスズラン堂に置いてくれるか？」

「アヤメ・・・余は駄目か？」

「うっ・・・魔王様その眼は反則ですよ」

「うるうるした小動物みたいな眼に弱いんですよ」

「私がかまいませんが、リオンはどうですか？」

「・・・僕もかまいませんよ師匠」

「リオンが賛成してくれるとは思いませんでした・・・でも なら大丈夫ですね」

「リオンもこう言ってくれたので大丈夫ですよ」

「そうか！余を連れて行ってくれるか！」

「魔王様はとっても嬉しそうに顔を輝かせる」

「はい、お連れしますよ」

「悪いな、魔王様を頼んだ・・・」

「はい、分かりました」

スラリルさんは苦笑しながら私に向かってそう言った

「では、魔王様行きましょうか」

「ああ、余を連れて行ってくれ」

魔王様の手を取りながら話しかける

「スラリルさん、では行きますね」

「ああ、よろしく頼む」

「ええ、わかってます」

私は魔王様とリオンを連れて魔王城を出てスズラン堂への帰り道を進んだ

第八話 魔王様のお願い（後書き）

魔王様との同棲がはじまります

第九話 帰宅

スズラン堂へ着いた私たちはリビングへと行きました
もう日がくれ夜になっていました

「魔王様、これからどうします？」

私は目の前に座っている魔王様に問いかけました

「・・・余を此処に置いてくれぬか？」

「ええ、いいですよ でも魔王様にも仕事の手伝いをしてもらいた
いんですが」

何もせずに居候はリオンに不公平ですからね

「もちろん するぞ！何でも言ってくれ！」

案外あっさり承諾してくれました 素直で可愛い魔王様です

「そうですね ありがとうございます」

「では これから魔王様の部屋へ案内しますね」

たしか 一部屋空いてましたよね

「・・・魔王様じゃなくてサエラと呼んで欲しい」

魔王様が突然呟いた

「アヤメの願いを聞いたんだから、余の願いも聞いてくれ」

・・・可愛いです しかも願ったり叶ったりのお願いじゃないですか

「そうですね ではサエラの部屋へ行きましょうか」

「う・・・うむ」

照れて嬉しそうにしてるサエラは可愛いです

・・・これが友人の言っていた萌えでしょうか・・・

私はサエラを空き部屋へと案内する

「ここがサエラの部屋ですよ」

「そうか余の部屋か」

魔王城の部屋よりは狭いが我慢してもらうしかない

ドアを開け中に入った 定期的に掃除していたのでそんなに汚れてはいなかった

中にあるのはベットとテーブルだけが・・・

「サエラ、必要なものは他の所から明日持ってきてきましょう」

「わかった 余はこの部屋気に入ったぞ」

「それはよかったです」

とりあえず明日からサエラとの生活が始まるんだな
・・・アプローチして好きになってもらわないと

大丈夫、私ならできる友人に天然たらし と言われた私なら
相手は中身男だけど・・・
初恋をみのらせてみせますよ

「じゃあ今日はこれで また明日、サエラ」

部屋を出ながらサエラに声をかける

「ああ、また明日だ アヤメ」

部屋を出て自室へと向かう

ああ、今日は最高の一日でした
いい夢が見れそうです

第九話 帰宅（後書き）

魔王様との生活編始まります

周りからみた 店主と魔王

リオンside

魔王様とゆう女の人が階段から落ちてきたときは本当に驚いたでも師匠は素早い動きで女の人を助けることに成功していた

さすが師匠です！俺は尊敬の眼差しで師匠をみるでも、師匠は助けた女の人をなかなか降そうとしない

女の人に見惚れているようだった

・・・これは恋の予感だろうか・・・

女の人に興味がないと言っていた師匠が恋・・・！

・・・少し寂しいですけど俺は精一杯応援します 師匠！

スラリルside

魔王様が落ちて来られた時は本当に心配したでも さすがはアヤメだな・・・

見事に魔王様を受け止めてくれた・・・
私は安心して、ほっと息をついた

しかし魔王様の顔が紅い・・・
これはもしかしくなくてもアヤメに一目惚れしてしまったのだろう・・・
顔がかなりいいアヤメだから仕方ないと言えば仕方ない

ここは魔王様の遅い初恋のために臣下として応援しましょう
アヤメも魔王様に一目惚れしたのだろうし・・・

アヤメの性格から考えてあちらからアプローチしてくれるだろうし・
・

元々は女だったらしいが魔王様よりいざという時は男前で積極的だ
からな・・・

奥手でヘタレの魔王様にはぴったりだ・・・

魔王様、スラリルは応援していますよ

第十話

師匠の師匠きたる

その一（前書き）

短いです

第十話 師匠の師匠きたる その一

サエラがスズラン堂に来て一週間がたちました

最初はぎこちなかった店の手伝いもだんだん慣れてきたようです

ちなみにサエラの普段着は男物っぽい服が多いですかね

元男性だからしょうがないんですけど・・・

あれだけ可愛いと私はスカートとかはいてもらいたいんですよ・・・

・・・男物着てても美少女にしか見えませんよ

とりあえず私はアピールしてますよ・・・

サエラって・・・結構鈍いんですよ・・・はやく気づいてください・・・

「アヤメくこつち来てくれ」

サエラが呼んでます・・・可愛いです・・・

「どうしました」

「うむ、手紙が来てるぞ」

そうやってサエラに手渡された手紙に書いてあった送り主の名前は私の師匠からだった・・・

・・・ああ、そういえば師匠が来る時期ですからね

個性が強い自分の師匠を思い出す

「・・・明日、私の師匠が来るそうです」

手紙を開け確認する・・・迎える準備をしておかないと・・・

「そうか 余はアヤメに世話になっているからな、挨拶させてもら
うぞ」

「ええ・・・ちょっと変わった人ですけど悪い人ではないので」

「そうか・・・会つのが楽しみだな」

・・・楽しみですが会つたびに結構疲れるんですよ

「はい・・・迎える準備をしておきましょう」

「余も手伝うぞ」

笑顔で言ってきたサエラに笑顔でかえす

さあ・・・明日は忙しくなりそうです 頑張りましょう
そつ心に決めて店の仕事を再開する

ああ 明日が楽しみですな

第十一話 その二

私は師匠の来る朝に休業中の看板を店の前にたてる

・師匠がくるとゆう事はミサキさんも来てくれるでしょうか・・・

風変わりな師匠の奥さんである彼女を思い出す

ミサキさんは私と同じ世界からトリップしてきた男装している女性だが

とても綺麗で格好良く私の憧れの人なんです

親身になってアドバイスをくれたとてもいい人です

・師匠を受け止められる包容力は本当に凄いと尊敬します

師匠もミサキさんには弱いですし・・・

まあ 男装のミサキさんと女装の師匠はお似合いです

美男美女にみえますよ

ミサキさんに会えるように願っておきましょう

そこまで考え店の中へと入る、サエラとリオンは朝に弱くまだ起きてきていない

二人を起こすのは私の役割です

まずはリオンですね リオンの部屋へとむかいドアをノックする

「リオン朝です 起きて下さい」

・・・反応はいつも通りありません

仕方ないですねえ

「入りますよ」

リオンの部屋へと入り、ベッドで寝ているリオンに声をかけ起こす

「リオン、起きて下さい。ほら朝ですよ」

・・・反応はないです、埒があかないのでリオンの顔に少量の水をかけてみました

「・・・うん・・・師匠？」

うつすら眼開けリオンは問いかけてきました
可愛いですがもっとはやく起きて下さい

「おはようございます 朝ご飯できてますからはやく来てください
ね」

「はい・・・分かりました」

まだ眠たそうなりオンに声をかけ次はサエラの部屋へと向います
サエラもリオンに負けず劣らず寝起きが悪いです

「サエラ 起きてますか？」

ドアの前で問いかける・・・返事はありません

「・・・入りますよ」

仮りに性別が男性の私が今女性であるサエラの部屋に入るのは
少しアレだと思っんですけどね
・・・不可抗力ですよ

部屋の中へと入る

サエラの寝ているベットへと近寄る

「う・・・んう」

寝言を呟きながら幸せそうに寝ているサエラに声をかけ起こす

「ほら 起きて下さい」

「・・・後・・・5分・・・すう」

寝ぼけながら返事をし再び眠ろうとしたサエラに
少々呆れながら耳元に口を近づけ囁やく

「・・・襲いますよ?」

効果バツグンの言葉を囁やくと案の定サエラは
どもりながら顔を紅く染めベットから飛び起きる

「なっ!・・・なななな、何を言っんだ」

「・・・冗談ですよ 朝ご飯できてますから はやく来てくださいね」

・・・可愛すぎて一瞬理性が飛びそうになったのは秘密です

サエラの部屋から出てリオンが待っているだろうリビングに行く

「師匠 朝ご飯何ですか？」

「今日はフレンチトーストとサラダにココアですよ」

食器に料理を盛り付けながら返事をする

「サエラが来たら食べましょうね」

「サエラさんって寝起き悪いですね」

笑いながらリオンが言う

・・・リオンも充分悪いと思いますけど・・・

「おはよう・・・」

おや サエラが起きてきたみたいです

「おはようございます サエラさん」

リオンがサエラに挨拶をする

「おはようございます サエラ」

笑顔で私も挨拶をするとサエラは顔をうつすら紅く染めて目をそらされました

・・・冗談がすぎましたかね

「サエラ・・・怒ってます？」

サエラに聞く

「・・・怒ってない・・・ちょっと焦っただけだ」

相変わらず目をそらしながら答える

「冗談が過ぎましたね すみませんでした。さ、朝ご飯にしましよ
う」

サエラに謝罪をし朝ご飯を食べるよう促す

「・・・いただきます」「」

三人でいただきますを言い朝ご飯を食べ始める

「アヤメ 今日はアヤメの師匠が来る日だな」

フレンチトーストを齧りながらサエラが話しかけてくる

「ええ ですから今日は店はお休みです」

「そうなんですか？」

「はい 師匠が来ますからね ゆっくり話もしたいですし」

「余も挨拶をしたい いいか？」

「勿論です 個性の強い人ですけど・・・大丈夫ですか？」

「うむ」

「そうですか・・・リオンは大丈夫ですか？」

リオンは結構会ったことがあるので大丈夫だと思いますが・・・

「はい 慣れましたから」

「それは頼もしいです」

もう三人とも殆ど朝食を食べ終わりココアを飲みながら話す
甘いココアが美味しい

「それじゃあ たぶん昼ぐらいに来るはずですから よろしくお願
いしますね」

「はい」

「わかった」

返事を返されたところで朝食を三人とも食べ終わり

「」「」「ごちそうさま」「」

と言い私は後片付けにはいります

リオンとサエラが手伝ってくれるのではやく終わります

昼が待ちどろしいです ミサキさん・・・きてくれると良いです・・・

第十二話 その三

とりあえず昼がくるまでに準備をすませて待っている

「アヤメくきたわよ」

とゆう声と店の扉が開く音が聞こえました

・ ・ 来ましたね 師匠 ・ ・ 相変わらずです ・ ・

私は師匠を迎えに声の方へと行く

・ ・ ミサキさん来てくれました ・ ・

私の目に映ったのは緑の髪を腰まで伸ばし深緑の目をした見た目美女の女装した師匠と

藍色の肩までの綺麗な髪に黒い眼の格好良すぎる男装のミサキさんでした

ミサキさんは整った涼しげな美人さんですよ ・ ・

ミサキさん相変わらず格好良すぎます美人すぎます ・ ・ ・
憧れちゃいますよ ・ ・ うはあ 恰好いいです

「久しぶりです師匠 ミサキさん」

挨拶をすると

「久しぶりね アヤメ」

師匠 女口調は相変わらずですね

声も女っぽく変えていますし

「久しぶり アヤメ君」

笑顔で挨拶してくれました

うん 美人さんです

「はい 取りあえず中へ入ってください 紹介したい人もいますから」

「あら？なぐに 彼女？すみにおけないわね」

「そうなの？会ってみたいな」

師匠がニヤニヤしながらつついてきます

・・・ウザイです やめてください

ミサキさんはいいです 師匠みたいにからかいを感じません

「・・・中に入りましょう サエラもリオンも待ってますよ」

「サエラちゃんってゆうのね・・・堅物のアヤメの彼女、見てみたいわ」

「楽しみだなぐふふ 挨拶しないとね」

堅物って何ですか・・・堅物って

私は好きな人ができなかつただけですよ

「・・・アヤメ、そちらの方々が客人か？」

・もたもたしてたらサエラ迎えにきちゃいましたよ

「え・・・ええ、こちらが「可愛いつ！何この可愛い子」

・・・そう言っつて師匠がサエラに抱きついて行きました
サエラが困ってるじゃないですか

私のほうへ、助けて・・・ っつて目で見てきてるじゃないですか

「師匠・・・サエラに抱きつかないでください」

・・・サエラに触らないでくださいよ

師匠は女装してても一応男なんですから

「いゝじゃない 減るもんじゃなし」

「減ります、私が嫌なんです 離してください」

「・・・うん もう離してあげようね 嫌がってるからその子」

ミサキさんも味方してくれました、離してください師匠

「・・・しかたないわね」

そう言っつて渋々サエラを解放した師匠は

「初めまして アヤメの師匠のセラよ サエラちゃん」

「私はミサキだよ セラがごめんね」

「は・・・はい 余はサエラといいます アヤメに世話になってます」

とゆう挨拶をかわしていた

・・・中にはいりましょう そろそろ

「・・・リオンが待ってるのでそろそろ行きませんか？」

「あ、そうね リオン君にも会いたいわ〜」

「うん 久しぶりだな〜」

「さ、行きましょう」

そう言ってサエラと師匠の間にわってはいり
師匠にまた抱きつかれるとたまりませんからね

リオンの待っているリビングへと入る

いつもは三人分しかない椅子も今日はきちんと五人分用意してある

皆に椅子に座るよう促し私は飲み物の用意をする

今日の為に用意したのはなかなか手に入らない最高級の紅茶と
私の手作りのお菓子だ

コポコポとお湯を沸かす

ああ やっぱり師匠と会って少し疲れるなあ

第十二話 その三（後書き）

新キャラ登場です！

第十三話 その四

私は紅茶と手作りクッキーを持って皆のいるテーブルへと行く

「美味しそうですね！師匠！！」

ニコニコと嬉しそうに話しかけてきたリオンが可愛い

「ありがとうございます、私が作ってみたんです 食べてみてください」

「はい！」

「美味しそうだね いただきね」

アヤメさんとリオンがクッキーを食べる

「美味しいです・・・モグ」

「本当 美味しいね」

二人とも美味しいと言ってくれました

リオン、そんなに急いで食べなくてもまだまだ一杯ありますからね

・・・サエラは師匠に絡まれていますね

師匠に接近され困ったオーラを出しているサエラと師匠の方を見る
・・・近づきすぎじゃないですかね

「師匠、サエラ困ってますから」

「そう？まあ・・・この辺にしときましょうか」

「た・・・助かった・・・」

サエラに絡むのを止め師匠は私達の方を向き
皆で談笑する

「ん～相変わらず美味しいわね・・・」

「ありがとうございます」

師匠は私の料理の腕は師匠を超えたと言ってくれている
嬉しい限りです

「そういえば、アヤメ君が欲しがってた物できたから持ってきたよ」

そう言っつてミサキさんがカバンから取り出し渡してくれたのは

「味噌ですか！ありがとうございます！！」

そう味噌だこの世界にはなくて懐かしいと言っつたらミサキさんが
少し待ってくれたら作れると言っつて下さったので持ってきていた
きました

これで味噌汁が作れます

「ううん 私も来たとき懐かしくて作っつたから」

「ありがとうございます・・・またお礼しますね」

お礼は何がいいですかね」

「気にしなくていいよ　でも・・・そうだなあ　また料理作って欲しいなあ」

「そんな事でしたら喜んでしますよ」

料理は好きですから！

「うん　ありがとう」

「はい」

そんなやり取りをしている内に時間はどんどん過ぎて

師匠達が帰らなくなるとはいけない時間になってしまいました

もつと話をしたかったんですけどね・・・

「私たちもう帰らないといけないわね」

「そうだね」

師匠達がそんなやり取りをする

「・・・でもその前にサエラちゃんとお話させてくれる？」

唐突に師匠が私の方を向き問いかけてきました

「・・・サエラが決める事ですよ」

私が決める事では無いとおもいます

「余は・・・話したい」

サエラがそうしたいと言うなら良いと思います・・・
少し尺ですけど・・・

「そう・・・じゃあちよつとあつちで話しましょう」

「ああ・・・」

そう言い二人は店の奥の部屋へと消えていきました・・・
・・・サエラの部屋で話すんでしょうね・・・
変な事してくれないといいんですけど・・・

そんな心配が胸をよぎる

・・・師匠達が帰ってくるまでミサキさんとリオンと
楽しくお話してましょつか・・・

第十四話

遅い……。

師匠とサエラが話をすると行ってサエラの部屋にいつてからも二時間はたっている。

そろそろ出てくるように言ったほうがいいのでしょうか……。

「ミサキさん、よびにいったほうがいいでしょうか？」

「うーん そうだねえ、もう少しまって来なかったらよびにいこうか」

ミサキさんはのんびりと紅茶を飲みながら答えた。

「そうですね・・・」

そんな会話をしていた時ちょうど

「ごめん 遅くなっちゃった」

テヘツ なんていらつく効果音と共に師匠がサエラを連れてこちらへと向かってきました

「遅いですよ 師匠」

少し苛々しながら師匠へと文句を言う。

「ごめんごめん でもサエラちゃんと一杯話せたわ」

「そうですねか・・・サエラ、変なことされませんでしたか？」

師匠にセクハラ何かされた日には全力で戦闘です

「し・・・失礼だぞ！アヤメ。何もされてはいない」

そんな事を言いながら目が泳いで心なしか顔も少し赤い気がします
けど

「・・・それならいいんですけど」

師匠はミサキさん一筋なのは分かりきった事ですけど・・・私の恥ずかしい過去を暴露したんじゃないやあ・・・

・・・今思い出しても恥ずかしい過去が頭の中に浮かびあがってくる
うわああああ やめて話さないで〜！

「そうそう。じゃあ私達帰るわ」

「うん アヤメ君 リオン君 サエラちゃん またね」

ミサキさんと師匠が別れの挨拶をして帰って行きました・・・
・・・つかれた

やはり何時も師匠が来ると疲れます・・・

「アヤメ 疲れたのか？なら今日の夕飯は余が作るから休んでくれ」
ぐったりと椅子に座りこんだ私に向かってそう言ってくれました。

「・・・ではお言葉に甘えて」

「うむ まかしてくれ！」

・・・その後サエラが作ってくれた夕飯がさらに私の疲れに追い打ちをかけることになるとは
この時の私は思いもみませんでした。

第十四話 (後書き)

短いですね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2073q/>

異世界の店主さん

2011年8月26日17時23分発行